

センターだより

令和4年6月15日

No. 74

東濃西部少年センター TEL23-3455 FAX26-8813

所 長 今 井 宏 明
指導主任 松 澤 朗
事 務 柴 田 弥 生

「帰りたい家庭・通いたい学校・住みたい地域」

令和4年度がスタートしました。

まだまだ、「新型コロナウイルス感染症」の終息の気配がみられず、心配な状況が続いています。

昨年度までの2年間、少年センターの活動も自粛傾向にありましたが、今年度こそは通常通り実施できる「安心・安全な毎日の暮らし」が戻ってくれることを願っています。

こうした不安定な社会情勢の中であるからこそ、地域に暮らす子どもたちには、健康で、明るく、元気に逞しく育ってほしいと願っています。そのためにも、子どもたちにとって、「家庭」「学校」「地域」が温かみのある居場所でありたいです。

「早く帰りたいと思える、温かみのある家族と暮らせる家庭」
「楽しいと思って、安心して通い続けられる安全で夢のある学校」
「いつまでも、長く住み続けていたいと愛着がもてる地域」

どんな「家庭」「学校」「地域」になれば、子どもたちは心穏やかに、楽しく、安心して過ごすことができるのでしょうか。それぞれの立場で大人が知恵を出し合い、工夫しながら子どもたちと接しています。

そんな毎日の暮らしの中で大切にしたいこと・・・。

それは「家庭・学校・地域が協力し連携し合う」ことです。

言い換えれば、「仲良く、協力する」ことです。当たり前のことかもしれませんが、この「当たり前のこと」が、日常の生活の中で忘れ去られてしまうことも、当たり前のように起きてしまっています。

子どもたちを取り巻く環境を整えるため、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校、教育委員会、警察署、その他多くの関係機関がそれぞれの立場で、熱心に取り組んでいただいています。

少年センターとしても事業の一つとして、「少年指導員」として委嘱をさせていただいた地域の方による「声かけ活動」を行っています。

お住いの近くの地域を中心に回っていただいている指導員の皆様方のおかげで、子どもたちの安全は守られ、安心して暮らすことができます。子どもたちの安全と共に、指導員の皆様方におかれましても、事故やけがに十分注意していただき、無理のない中で声かけ活動を行っていただきますようお願いいたします。

少年センターとしては、指導員の方々の「地域の子どもたちを愛する思い」などを大切にし、そうした活動を広く伝え、多くの方々に知っていただくようにしていきたいです。

「高校生（瑞浪高校）（多治見工業高校）による啓発活動」

4月22日午後3時から、瑞浪駅前で「青少年地域で守ろう 育てよう」と印刷された東濃西部少年センター作成のマスクを瑞浪駅利用者の方々に配布しました。配布してくれたのは、瑞浪高等学校のMSリーダーズのメンバー約15名です。瑞浪高等学校の生徒の皆さんは、これまでも感染対策などに気を遣いながら啓発活動において、熱心に取り組んで頂いています。



一つ一つ丁寧に包装されたマスクを道行く人に笑顔添えて渡していました。こうした見知らぬ人への手渡しによる配布はとても難しく、コロナ禍であるだけに、快く受け取っていただける方ばかりではありません。しかし、今回の活動では、瑞浪高校の生徒さんのさわやかな笑顔もあって、多くの方々が受け取っていただけ、「明るい街づくり」という一場面でもありました。



6月1日午前8時から、多治見工業高等学校のMSリーダーズのメンバー約20名の生徒の皆さんが登校してきた生徒へ、「帰りたい家庭」「通いたい学校」「住みたい地域」とプリントされたチラシが入ったマスクを配布すると同時に、学校付近を通られる地域の方々に「朝の挨拶」を交わしていました。生徒さんと共に、校長先生をはじめとして多くの先生方も一緒に活動に参加され、とても和やかでさわやかな雰囲気でした。

今回紹介した高校以外にも、交通安全に関わる呼びかけなど、様々な啓発活動を実施してみえる高校もあります。今後、紹介させていただきます。

「少年補導部会（WEB会議）」より

4月28日に「岐阜県青少年育成県民会」主催の「少年補導部会」が行われました。今回の会議は昨年に引き続き、感染防止のためWEB会議で行われ、参加者は、主に岐阜県内の少年センターの職員で、18名の者が約2時間に渡って、意見交流などを行いました。岐阜県内の各市町村で様々な取り組みが行われていることがよくわかりました。東濃三市で行っている「声かけ活動」については、「指導という視点ではなく、子どもたちに寄り添った声かけという接し方を大切にしている」という点について、高く評価して頂きました。

意見交流の際、岐阜県内の各センターが抱える共通の課題として、「コロナ禍の中での巡回活動の在り方」が話題になりました。関わって頂いている方々の健康面を配慮し、自粛及び縮小している市町村もあるようです。東濃三市においても同様の課題を抱えていますが、無理のない中で安全に、そして各グループメンバーの状況を考慮しながら、「声かけ活動」を行っていきたいです。

WEB会議の後半には、「少年非行の概況」と題して、岐阜県警察本部生活安全課少年部の方からの講話を聴きました。その際、講話して頂いた「田中聡さん」は、6月11日に開催しました「新任指導員研修会」に講師としてお招きした講師の方です。以前、この東濃地区の担当をしてみえた方ですので、東濃三市の状況はとても詳しく、今後の「声かけ活動」の参考にさせていただける貴重なお話が聞けました。

「ホームページの紹介」

「東濃西部少年センター」の活動状況のお知らせがホームページに掲載されています。
「東濃西部広域行政事務組合」のサイトに入っていますので、よろしければご覧ください。
ホームページを見られる際には、「東濃西部少年センター」で検索してみてください。

「東濃西部少年センターへの相談・あれこれ」

岐阜県内や多治見・瑞浪・土岐の中には、いくつもの相談窓口があります。それぞれ特徴がありますが、主に「相談」が中心になっています。

東濃西部少年センターにおいても、「電話」「メール」「来所」など、様々な形態で活用していただいています。

東濃西部少年センターでは、昨年度から、「悩みごと相談」だけではなく、私たちが暮らす街の様子などから、「明るい話題」もお知らせ頂くよう、呼びかけてきました。おかげさまで、連絡して頂く件数も多くなってきています。

もちろん、「悩みごと」として相談して下さることが多く、その内容の傾向としては、「家庭でのこと」と「学校でのこと」が多いです。そして、その内容の大半は「本来なら、家族や学校の先生に相談できると良いこと」が中心です。しかし、「家族に心配をかけさせたくない」「先生にどうみられるか不安」などと悩み、第三者に助けを求めてくるケースが多いようです。

少年センターでは、相談者の方の話をじっくり聞いた上で、相談者の力になれたらと思いついて対応しています。しかし、容易く解決するような問題ではないことが多く、できるだけ「相談者の身近で、親身になって寄り添っていただけるはずの家族や先生に苦しい胸の内を相談すること」を勧めるように努めています。決して、無理強いはしませんが、多くの相談者に共通することとして、「本当は、身近な人に聞いてほしい。分かってほしい。助けてほしい。」という相談者の思いを感じる人が多いです。

これまでも、少年センターが「家族の方や学校の先生への橋渡し」を行うこともありました。どの家庭、そして学校も、快く受け止めて頂き、早期解決につながるケースが多いです。改めて、連携の大切さやその力の大きさを感じています。

そして、相談後に共通することは、「初めは相談しようか迷ったけど、思い切って相談してよかった」と言われる方が多く、とても嬉しいお言葉です。

今後も、家庭・学校・地域との連携を大切にしながら、少年センターを信頼して頂き、「橋渡し」をさせていただけるようにしていきたいです。

私たちの街に暮らす子供たちの笑顔、健やかな成長のために、見守っていきたいです。

「帰りたい家庭・通いたい学校・住みたい地域」

☆「楽しい話題」「伝えたい情報」「ちょっとした悩みごと」

(身近な出来事など、連絡・相談ください)

「東濃西部少年センター」

0120-873-246 (携帯からもOK)

anshin55@crux.ocn.ne.jp (24時間受付)

相談時刻・メール返信は、10時～17時(日・月休み)

「令和4年度 少年指導員委嘱式」

令和4年5月7日（土）「土岐市文化プラザルナホール」において、令和4年度の東濃西部少年センター「少年指導員委嘱式」を開催しました。



昨年度までの2年間、新型コロナウイルス感染症の影響で中止していました。

今年度は、土岐市市長の加藤淳司様、土岐市教育委員会教育長の山田恭正様、多治見警察署生活安全課課長の竹藪洋様をご来賓にお招きし3年ぶりの開催となりました。

ゴールデンウィーク期間中での開催でしたが、多数の指導員の方々に出席して頂き感謝しています。地区別会議において、「班長」をお願いした方には一年間お世話いただきますが、よろしくお願いいたします。

また、各地区指導部役員の方々には、会場準備並びに後片付けなど、お手伝いいただき、ありがとうございました。

多治見警察署の竹藪洋課長様のお話「少年非行の概況」では、「10年前と比べると三市共に少年非行件数が減少しており、とても落ち着いてきている」というお話がありました。青少年の健やかな成長を願って活動している者にとっては、とても嬉しいお話でした。

こうした落ち着いた街づくりにおいて、皆さんに日々行っていただいている「声かけ活動」は大きな影響を与えて頂いています。

「何気ない一声」「笑顔のあいさつ」が、温かな街づくりにつながっているようです。



尚、委嘱式の前に、長年指導員として活動していただいている方々の「表彰式」を実施しました。

以下に表彰された方々の紹介をさせていただきます。

☆所長表彰（指導員3年） ※敬称略

【多治見地区】

佐藤 美希 長瀬あつ子 古川 浩行 松田 健治

【土岐地区】

曾根 康友 中島千枝美 岩井 妙子

☆管理者表彰（指導員5年） ※敬称略

【多治見地区】

白石 清 堤 達男 石黒喜代子 服部 元幸

【瑞浪地区】

遠藤 将寿

「いじめの根源」 少年センター 所長 今井宏明

少年センターを含め、相談業務を行っている窓口に寄せられる相談内容には「いじめ問題」に関わるものがあります。

一言で「いじめ」と言いますが、別の言い方だと「からかい」「いじり」「ちょっかい」「陰口」「無視」などなど、その『方法・手段』は様々です。

こうした「いじめ」のような言動を人が行ってしまうことは、ここ最近のことではなく、ずいぶん昔からあったように思います。

決して、好ましい行いではないことを誰もが理解できているはずなのに、何故やってしまうのか？

教師生活を振り返ってみると、次のような場面が思い浮かんできます。

「いじめは『ダメ』だと認識していても、いじめてしまう。」

「『いじめである』と決して認めようとしない」

そんな児童生徒や集団、そしてその保護者と関わるのが幾度もありました。

そうした際、いじめをする行為を正当化するために、以下のような言葉を聞くことがありました。

「自分の思いと同じではない人を認められない。許せない。」

「自分と比べた時、その言動がイライラする。」

人にはそれぞれの「価値観」というものがあり、それらが自分と他人とが異なることも多くあります。

ただ、今いじめをおこなっている者たちに気付いてほしいのは、

自分と他人との違いにおいて、

「相手に目を向け非を求めるのではなく、自分自身に目を向け自らの生き方を見つめ直せないものか」

人と人との「比べる」という行為は、私たちが生きる社会では当たり前のように行われています。

こうした社会をつくっている背景にあるものは何か？

これは、この世に生まれ、育った環境の影響が大きいように思います。

人は生まれたすぐに「標準体重」と比べられ、

「鳴き声の大きさ」や「うんちの量」までも比較される。

そうした光景を「一喜一憂」する大人たちに囲まれ育つ子ども。

当たり前のように、

幼少期から小中高と「人との比較」の中で生活を送る。

知らずして「人と自分を比べる習慣」が身についてしまう。

学校教育の中では、毎日「答え合わせ」が行われている。

数学や英語などの教科の答え合わせであれば

「答え」はある程度絞られ、方向性も共通で近い。

しかし、人としての生き方において
「決まった答え」は存在しない。
存在するはずがない。
なぜなら、
「自分と他人とは違う」

「いじめの根源は何なのか」
自分自身の子どもの頃や

このことが「理解できていない」「解釈を間違えている」者がいじめを誘発している。
もちろん、「人と比べたり、競い合ったりすること」をすべて否定するものではない。
しかし、「いじめの根源にあるもの」を掘り下げてみると次のような傾向にある。

このことは、長年教師を勤め退職した今、
ある出会いから強く感じるようになった。

この春、出会ったその女性は
他人との意見の食い違いやトラブルに遭遇した際
まず、自分自身の振る舞いを見つめ直している。
たとえ、「人からの裏切りであっても・・・。」
「まず、自分を見つめ直す」
こうした人は、「いじめの世界（いじめる側）には無縁」であろう。
ただし、「いじめられる側」になってしまう危険性はある。
正しいことをおこなっている人が傷つくような
理不尽な世の中を決してつくってはいけない。